

歴史散策クラブ ～平成27年度（1～12月）活動紹介～

■進め方

「歩く・見る・語る」をモットーに、近郊の文化財・寺社・名所旧跡などの散策を通して地域の歴史や文化を学び、そしてクラブの親睦を深めてきた。

運営は誰にも無理なく参加できるように、出発時間や散策距離などにも配慮した企画内容とし、また資料も学習しやすいように事前配布を原則として例会を進めてきた。

■活動内容

1月皇居周辺の散策、2月鳩山町 JAXA 地球観測センター、金芽米工場の東洋ライス見学、3月板橋宿の面影をたどる、4月桜咲く巣鴨・染井・六義園散策&花見、5月世田谷巡り、松陰神社、代官屋敷ほか、6月住宅街に点在する公園・寺社散策、7月河越館跡&夏祭りの見学、8月特別会員門内氏による講義「石神井城主・豊島氏について」&暑気払い、9月石神井公園、石神井城跡散策、10月西武沿線下落合散策、11月4日岩殿山を登る（有志）、28日秩父の石塔婆（日本一の板碑）～長瀬溪谷、12月所沢旧町巡り

■会議など

3月全体会議、10月全体会議、11月役員会議、12月総会&忘年会

27年度活動一部・活動紹介

※続きは、[歴史散策クラブ](#) のブログをご覧ください。

江戸市民を支えた水道



■5月23日（土）世田谷巡り 写真は世田谷区立郷土資料館に展示されている玉川上水の木樋

江戸の下町は埋め立て地で井戸を掘っても海水が混じり飲み水にならなかつたらしい。そこで江戸市民への飲料水を目的に1653年（承応3）に開削されたのが玉川上水。羽村で多摩川の水を取水、水路は四谷大木戸から暗渠となり江戸市中には石樋と木樋で配水した。この木樋は四谷で発見されたもの。

最近、東京駅舎の基礎に使用されていた1万本以上の松の杭が話題になった。木樋は松や檜の板で作られ、防水には木の皮を細かく砕いた繊維が隙間に使用されていた。松の木が水に強いことは知られているが、地震など災害を乗り越えてきた、往時の知恵や技術のすばらしさに驚く。

河越氏の館は鎌倉時代の武蔵国政庁



■7月12日(日)河越氏の河越館跡&夏祭り見学

東武東上線霞が関駅で下車、徒歩15分のところに河越館跡はある。鎌倉時代に幕府の武蔵国政庁として機能した。左写真中央奥に少し高くなっているのが土塁。右写真の正面が土塁で、右奥に河越氏の地仏堂で、現在の常楽寺(時宗)が見える。土塁、堀が一部残るほか、井戸、住居などの遺構も発見されており、昭和59年に国の指定史跡になっている。

河越氏とは・・・桓武平氏の流れをくむ秩父氏を祖として、平安時代末期から平氏・源氏・北条氏・足利氏という時の権力者と密接な関係を築きつつ南北朝時代までの200年間活躍した武蔵国最大の豪族である。河越太郎重頼の娘・京姫が源義経の正妻に選ばれていることはよく知られている。河越氏が有力な武士であったことがわかる。

河越氏の役職・・・国司の代理職に就き、武蔵国の在庁筆頭格として武蔵七党などの中小武士団を取りまとめていた。

館周辺環境・・・水運で重要な役割を果たす入間川、中世には路線の一部が鎌倉街道として継承された東山道武蔵路を至近に臨む位置にある。近くの霞ヶ関遺跡は、武蔵国入間郡の郡家(役所)の推定地とされている。人や物、情報が集まってくる交通の要衝であった。

武田氏滅亡で岩殿山を越えて三富新田に



■11月4日(水) 岩殿山を登る。

中央線大月駅を下車、15分ほど歩くと、鏡岩と呼ばれる岩の荒々しい岩殿山が正面に見えてくる。H28.1.17(日)NHK大河ドラマ「真田丸」でも放映されたが、織田軍に追われた勝頼は真田の岩櫃城

ではなく、武田家の家臣小山田氏の岩殿城に向かう。ところが小山田氏の裏切りに会い天目山で自刃した。標高 634m の山頂には岩殿城跡がある。ここからの富士山の眺めは天下一品だといわれている。

私が岩殿山の登山にこだわったのは、次のような伝承話があるからだ。

前略～甲斐武田一族の末裔で、信玄、勝頼の亡き後、その一部が甲州から関東に山伝いに逃れ、岩殿山あたりから高麗郷に入り安住の地を選んだようです。月日は流れ、元禄年間にこの新田開拓を聞き三富開拓に参加したのだと先代から聞いています。現在の高麗川から三人の兄弟で開拓に参加したそうです。上富、中富の武田家の先祖がその三人の兄弟だと聞いております。後略～（武田氏著「我が半生記」より）

今回、岩殿山を訪れ、またふるさと三富新田の歴史に新たなページが加わった。

江戸時代最大の洪水



■ 11月28日(水)秩父の石塔婆(日本一の板碑)～長瀬溪谷を歩く 写真右は「寛保洪水位磨崖標」

秩父線樋口駅ホームから山側に目をやると看板に「一水一」の字が見え、この位置まで水が来たことが書かれていた。どうやらこの辺で大きな水害があったらしい。「寛保洪水位磨崖標」が、写真の右奥に見える寺の前(写真右)にあるという。散策コースにはなかったが代表して見学してきた。

「寛保洪水位磨崖標」(県指定史跡)の標識には次のように書かれていた。

『寛保2年(1742)関東各地に未曾有の災害をもたらした、大洪水の水位を示す史跡である。旧暦7月27日から4昼夜に及ぶ豪雨のため、8月1日夜、荒川の水位は最高に達し、この付近一帯は、ことごとく水底に没した。後日、地元の有志四方田弥兵衛・滝上市右衛門によってこの岩壁に「水」という字の磨崖標が刻まれた。当時、ここまで増水したと一目でわかる、荒川洪水史の貴重な記録である。』

その時の水位は現在の荒川の川床から、実に24メートル(荒川上流河川事務所資料)もあったという。江戸時代最大の洪水で、利根川、荒川の堤防が決壊し、江戸の下谷、本所、深川の溺死者4千名、現関東平野部での死者の合計は2万人とする説もあるようだ。

今までに遭遇したこともない災害とよくいうが、この世の災害はいつの時か、どこかで、誰かが遭っている。今日、こうした教訓が活かせてないのが悲しい。